

二松學舎大学21世紀COEプログラム

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

雙松通訊

「代表」を引き継いで

二松學舎大学長 今西 幹一

台湾大学東アジア文明研究センター主催

「第4回日本漢学
国際シンポジウム」に参加して

学校法人二松学舎 理事長 佐藤 保

21世紀COEプログラム

第二年を迎えて

総括責任者 白藤 禮幸

Newsletter
SOSHOTSUJIN
No.2

目次

1 「代表」を引き継いで

二松學舎大学長 今西 幹一

2

台湾大学東アジア文明研究センター主催

「第4回日本漢学国際シンポジウム」に参加して

学校法人二松学舎 理事長 佐藤 保

3

21世紀COEプログラム第二年を迎えて

総括責任者 白藤 禮幸

平成16年度の活動報告

4

上古・中古日本漢文班

5

中世日本漢文班

6

近世・近代日本漢文班

7

朝鮮漢学班

8

漢文教育班

9

日中文化交流班

10

書誌学・目録データ班

11

平成16年度COE研究員研究報告

●日本における仏典の伝入と出版に関する研究

12

●伊藤鹿里旧蔵漢学資料の整理と研究

13

寄贈資料一覧

(平成16年12月～平成17年3月)

14

15

活動・会議一覧

(平成16年12月～平成17年3月)

- 講演会
- 現地調査
- 諸会議

16

和刻本古文真宝書影集1

●編集後記

17

おしらせ

「代表」を引き継いで



二松學舎大学長 今西 幹一

石川忠久前学長のご退任に伴い、この4月から学長の任に就くことになりました。当然の責務として本学におけるCOEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」を推進する組織の「代表」の席をも暖めることになりました。プログラムについては、旧年来佐藤保教授を総括責任者、高山節也教授を拠点リーダーとして、八つの研究班が編成され、学内外の関連研究者を動員してかつてないスタッフが構成され、すでに構築のための初年度の取組を経過しています。その間、研究班毎の研究の推進、国内外各地の文献資料の実地の調踏査、公開講演会等の開催等の活動がなされています。スタッフも本学専任・非常勤の教員に加えて、諸権威による学外研究協力者、客員研究員、そして研究員、研究助手の四十名を超える、本学としてもかつてない強力かつ厚な陣容になっています。間違いなく一定の成果、到達が確信できる陣容、布陣となっていて、心強い限りに思えます。

本年は、中間報告・成果を求められる年であり、その結果によっては今後の研究拠点の構築の計画と展望に大きな影響を受けることとなります。また小職の在任中に最終的な成果、研究の結実が求められます。その意味でも「代表」としての旗振りが必要かと思えます。更に、拠点、研究の組織化は、一応の到達、成果は見られなくてはならないし、見ると思えますが、それを更にどう受け継ぎ、発展させるか、建学の精神、レーゾンデートルとの関わりの中で、本学の教育研究のなかにいかに位置づけ取り入れるか、組織のなかに吸収するかという課題にも取り組む必要があります。また別に新たな漢文学研究、漢字文化研究の国内・国際的な学界の形成にも寄与、貢献して欲しいと念じます。基金についても文部科学省の補助をもとにどう裏付けるかという年々の課題が加わります。そうした意味でも大学の存立も懸けた重要な期間になるものと認識しています。

これまで私は事COEに関しては、学内機軸のサポーターくらいの立場でした。申請に対して採択の成否には喜憂は人一倍しておりました。採択されたときには「快哉」「流石二松學舎」の欣快の感も禁じ得ませんでした。他方で、世界における日本漢文学研究の拠点構築の課題に加えて、当初本学は拡張して求めている「漢字文化」がテーマが除外され縮小されたことについては（それなら我々も参画する余地があるかなという思いもありました）、残念ながらひとまずはそれが二松の「身の丈」に合ったものとして受容するし

かないかと思っていました。しかし、その方面への拡がりを意識しないで、日本漢文学研究の成果は望み得ないでしょうし、期間終了後の後日の発展的課題でもあろうかと思えます。

石川前学長は、ご専門の分野からして、本学COE対策の組織の真の「代表」足り得たかと思えます。小生は「門外漢」に等しいかもしれません。幸い、申請段階から率先して推進して来られた佐藤保教授が理事長に就任され（新たに白藤禮幸教授が総括責任者の任に当たっておられる）、その意味では心強い限りに思っています。力を合わせて、驥尾に付して、相共にプログラムの推進を計って参りたいと思えます。

時の中山文部科学相が、初等・中等の学校教育での漢詩文の素読の必要性を談話しています。敗戦後、伝統的なものをすべて旧弊、旧套として切り捨てて来た風潮が、ここに来てやっと見直される機運が生じて来ています。漢文教育、広い意味での古典教育の意図的な衰頹現象が、人倫の疲弊に繋がっているように思えてなりません。二松學舎が一種の使命として教育界に今後ともどのように繋がっていくか、方途が見えるようにも思えます。私が学んだ高等学校では、平素は中・日の教科書的漢詩文を読みながら、2年の3学期の期末試験に新聞の「吉田首相云々」の一面記事がボンと出され、全文漢文にしろという設問（平素の授業に添った設問などいっさいない、それがすべての試験が課される）、いまから思えば破天荒な漢文の時間でした。なぜかその時は満点だったのですが、また卒業に必要な単位は確保できるものとして、一部の単位を放棄して単位にはならない教育課程カリキュラム外の科目としての「漢文」の授業があり、それを採り1年間十八史略を読んだ記憶があります。却って正規の授業よりも印象に残っています。漢文の教員は「番山」と綽名された熊沢という名物教師でした。現在の高等学校教育では考えられない漢文教育の内容と水準でしたが、やはり史や語・字への知識にとどまらない、人間としての素養・世界観の形成、行動や認識の規範が養われて来たと思えます。

日本漢文学研究の拠点構築から所期される目標——それは佐藤理事長が本紙創刊号に示された4項目に尽きると思いますが、——の実現のほか、加えて副次的な収穫、想定外の成果をも連珠するものと期待してやみません。

台湾大学東アジア文明研究センター主催 「第4回日本漢学国際シンポジウム」に参加して

学校法人二松学舎 理事長 佐藤 保

今年の5月6日(金)、台湾大学で開催された第4回日本漢学国際シンポジウムに参加した。主催は同大学の東アジア文明研究センター(東亜文明研究中心)、シンポジウムのテーマは「日本漢学の研究方法」であった。

同センターは、2002年10月に台湾政府教育部(日本の文部科学省に相当)から補助金交付の裁定をうけて発足した大型の国家的なプロジェクトであり、我が国のCOEプログラムと同種のプロジェクトである。教育部によって採択された同プロジェクトの研究テーマは「東アジア近世の儒学経典訓解の伝統」、これまでそのテーマに沿った研究成果を東亜文明研究叢書として公開するかたわら、主として台湾・日本・韓国の研究者による国際シンポジウムを開催してきた。

したがって、今回のシンポジウムのテーマである「日本漢学」は、同センター本来の研究テーマではないが、近世儒学と日本漢学の密接な関連から、今回は東アジア文明研究センターが主催を引き受けたものであろう。因みに、第1回の国際日本漢学シンポジウムは、2001年3月16日・17日に台湾大学中文系・清華大学中文系・漢学研究中心の三者共催の形で開催され、その報告集が東亜文明研究叢書5『日本漢学研究初探』(張寶三・楊儒賓共編、2004年6月、台湾大学出版中心)として出版された。日本の勉誠出版から同じ書名で日本語訳が出版されている(2002年10月)。そして、第2回は2003年11月7日・8日、台湾大学中文系主催で開かれた。このシンポジウムに参加した日本中国学会前理事長の興膳宏氏の報告が、2003年第2号『日本中国学会便り』(同年12月20日)に載っている。第3回については、わたしは詳細を承知していない。

今回の参加者と発表の題目は、以下のとおりである。

基調報告

佐藤 保(二松学舎大学):「日本漢文学研究の現状と課題
—二松学舎大学の21世紀COEプログラムの目標—」

一般報告

池田 秀三(京都大学教授):

「京都大学における左伝学研究の伝統」

村山 吉廣(早稲田大学名誉教授):

「早稲田大学の漢学研究方法」

黄 俊 傑(台湾大学教授・東アジア文明研究センター長):

「洪沢栄一の『論語』解釈の二つの切り口」

中嶋 隆蔵(東北大学教授):

「金谷治先生の治学方法」

柴田 篤(九州大学教授):

「楠本正継博士の宋明儒学思想研究について」

石塚 晴通(北海道大学名誉教授):

「北海道大学の漢学研究方法」

楊 儒 賓(清華大学教授):

「《気学》及びその検証基準」

張 寶 三(台湾大学教授):

「吉川幸次郎の《詩経》研究方法」

パネルディスカッション

日本漢学における研究方法 — 回顧と展望

*参加者は、上記日本人全員と楊儒賓教授

以上、ここでは参加者名と演題を紹介しただけで、それぞれの報告内容についてはいま詳しく触れる余裕がないので、やがて刊行されるであろう報告集をみていただくしかない。ただし、わたしの基調報告の全文は本学COEプログラムのHPに公開している。実際の会議では、時間の関係でこの原稿を適当にかいつまんで話したもので、はたしてわたしの言いたいことが正確に伝わったかどうか、いささか懸念はしているが、わたしはできるだけ丁寧に我々が目指している日本漢文学研究の拠点づくりを説明してきたつもりである。

パネルディスカッションでのわたしの発言内容は、日本漢学研究にとって最良のガイド・ブックが、大修館書店が約40年も前に刊行した中国文化叢書第9巻の『日本漢学』であることを述べ、その上で最近の日本漢学研究の成果をふまえた同書の補訂が急務であることを訴え、日本漢学の研究には日本学と中国学それぞれの立場からのアプローチが必要且つ有効であろうという同書の編集者の提案を紹介した。

今年の9月には、今回の国際シンポジウムを主催した東アジア文明研究センターの活動が終了する予定と聞いている。しかし、台湾における日本漢学関係のシンポジウムは今後も何らかの形で続いて行くのではなからうか。9月の初めに開催される我々の国際シンポジウムと拠点リーダー会議には、台湾から黄俊傑教授と張寶三教授が参加されるので、その辺の情報をぜひ尋ねたいと思っている。

21世紀COEプログラム第二年を迎えて

総括責任者 白藤 禮幸

昨年7月、「革新的な学術分野」で採択されて発足した、二松学舎大学の21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」は、まず、日本漢文関係文献の所在調査のために、日本全国の4600余に及ぶ公立・私立の図書館等へのアンケート調査の実施から作業を始めた。その結果、約1350件の回答を得、併せて本学図書館・国文学研究資料館・斯道文庫等の機関に所蔵される図書館蔵書目録等を調査して、全国調査の基礎データの整備に努めた。また、8月には国際シンポジウム「東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来—日本・中国・台湾・韓国における漢文教育と漢文教科書をめぐって—」を開催し、漢字文化圏における漢文教育及び漢文教科書の状況について、日本・中国・台湾・韓国それぞれの特殊性と共通の課題等の検討を行った。各国の研究者の報告及び討論の内容は「資料集」と「報告集」の2冊の冊子にまとめた。さらに、本プログラムの最も中心的な課題である日本漢文学研究の世界的な現状を把握するために、外国及び国内の研究者を招聘して数回の講演会や研究会を催した。シンポジウム及び講演会・研究会は、国際的な研究者の交流と研究ネットワークづくりの一貫であるが、昨年度のそれらの開催状況については『雙松通説』創刊号と本号(第2号)に詳しく記されている。

本プログラム推進のために、学内にCOE事務局を立ち上げ、ホームページを開設したのは10月、同時にCOE研究員と助手を採用した。そして、データベース作成のためのシステムの開発を進めるかたわら、文献資料調査の年度計画に沿って、東北・北海道の主要な図書館を事業担当者が地域を分担して訪問調査し、蔵書目録等の資料収集を行った。

また、それとは別に、書店を通じて、本学にない蔵書目録・書目等の購入を行い、文献の所在データに関する資料は着実に増加しつつある。これらのデータは助手によって打ち込み作業が行われている。

COE研究員は若手研究者養成のために設けた制度であり、昨年度は2名を採用した。

第2年を迎えた今年度はさらに2名(うち1名は他大学出身者)

を増員し、現在は合計4名の若手研究者が研究を行っている。

また、本プログラムの考える日本漢文学の多様性に対応するため、その分野に応じた研究班を組織した。時代別、分野別など9つの研究班に分かれ、それぞれが全体像をイメージしつつ各班が担うべき役割に応じて研究を進めている。

昨年は、採択決定が年度の途中であったため、本プログラムの活動期間は実質半年であったが、本年は12ヶ月一杯に活動できる。本年の中部・北陸地方の図書館調査も7月から実施でき、夏期休暇を有効に使うことで効果を上げることができよう。各班による研究も具体的な計画として出されており、本プログラムの中間評価を受ける来春までに成果を上げるべく、鋭意努力が積み重ねられている。しかしながら、本プログラムの推進にはなお種々の課題が存在するの事実で、この際、改めて本プログラム採択時の「審査結果表」を再度読み返してみたい。特に、その「留意事項」の部分である。

日本学としての漢文研究とそのデータベース作りに研究対象を限定すべきであり、漢字文化そのものを問題とするには、事業推進担当者が十分とはいえない。漢文教育振興の熱意は解るが、その熱意を若手研究者に伝える努力が不十分であることから、革新的なアイデアにより漢文の魅力を伝えることを考慮されたい。

ここで認められているのは、日本学としての漢文研究、日本漢文研究のデータベース作り、革新的アイデアによる漢文教育、の三点である。我々はまずこの課題を第一に置くべきではなかろうか。上記の9つの研究班による研究が、班ごとの関心によって進められている結果、各班相互の連携を欠き、全体的にやや拡散気味であるのを是正するためにも、もう一度原点に立ち返って事業計画を見直さなければならない。

言うまでもなく、日本の歴史時代は中国から伝えられた漢字によって始まった。漢字漢文が日本文化の形成にどのような役割をはたし、何を生み出してきたのか。我々はこの最も基本的な課題を来問して見失うことなく、学際的な広い視点に立った研究態度の形成に努めなければならない。

上古・中古日本漢文班

主任：白藤 禮幸

担当者：山崎 正伸・吉原 浩人・谷本 玲大

協力者：河野貴美子

平成16年度の活動報告

本部会に属する者は、山崎正伸・谷本玲大・吉原浩人・白藤禮幸、協力者河野貴美子であるが、それぞれに研究テーマがあり、関心も異なるため、部会としての統一課題は立てず、それぞれにテーマを立て、個別に活動することにした。

白藤は、わが国の古代から中世までの漢字漢文文献の目録作成を目指し、『群書類従』800タイトルをカード化した。今後は、更に調査範囲を広げ、より完全なものを目指す。

この目録の下、各文献の古写本の所在など、別個に進行中の図書館調査とリンクさせ、また活字化テキストなどの情報を知ることができるような体制を作り上げ、日本漢文学研究に寄与することを目指す。この作業は、本プロジェクトとしても、最も基本的・根幹的なものとなるのである。

山崎・谷本班は、平安初期の成立と考えられる『新撰万葉集』の諸本対照校本の作成を目指す。谷本には既に共編著『新撰万葉集 諸本と研究』（2003年9月刊、和泉書院）があり、その成果の上で、なお、京都大学本、天理大学図書館本、大阪市立大学本などの古写本の調査を必要とし、本年度は天理大学図書館の調査を行った。そこで、江戸中期写本を虫損部を含めて細かく調査した。また、もと竹柏園に蔵されていて、しばらく所在不明で

あった板本をも発見し、本文整備に備えた。これは、特定文献についての極めて個別的な調査であるが、後の『和漢朗詠集』や、『詩歌合』に繋がっていくものであり、平安朝文学研究の上でもある位置を占めるものとなるう。

吉原班は、「大江匡房・永観の研究——文人と僧侶の院政期漢文学——」のテーマを立てる。この研究では、院政期大江匡房及び永観の著作に、日本漢文学の知見を生かした注釈を付けることを目指している。そのための調査として、16年度には、法相宗大本山興福寺・東大寺図書館・観山文庫に書誌調査を行った。本年度は予備調査であったが、観山文庫において、永観の『往生拾因』元永3年（1120）写本、同永禄11年写本を閲覧、同じく永観の『往生講式』の写本を観山文庫・東大寺図書館で十一本を調査するなど、一定の成果を得ることが出来た。また、協力者河野貴美子は上記の調査に協力しつつ、個人研究として、奈良・平安初期の南都寺院において、いかなる漢籍・辞書・音義書類が利用されていたかを調査するため、奈良朝善珠の著作と、院政期藏俊の注釈写本約二十点を調査し、『大正新修大藏経』にない記述を発見するなど、一定の成果を上げた。

近世・近代日本漢文班

主任：町 泉寿郎

担当者：横須賀 司久・大島 晃・山辺 進

協力者：ロバート・キャンベル

平成16年度の活動報告

A班

1. 江戸時代における和刻本とその祖本の研究
2. 江戸時代における漢籍の出版と考訂・校勘の学
3. 江戸前期における漢籍の注釈

上記課題は、江戸漢学研究の根幹をなすものである。16年度は、本格的な研究に着手するための準備活動・資料調査を行った。

B班

1. 漢学における江戸と明治の接点に関する研究

16年度はおもに資料収集に当たり、以下の収穫があった。島田篁村・三島中洲・井上哲次郎・那珂通世・根本通明らが明治10～20年代にかけて東大文学部、および帝国大学文科大学において講じたものとみられる講義ノート・聴講ノートが新たに見出された。更に、これらの人物の師承関係にあった人物にまで調査範囲を拡大し、江戸後期にさかのぼって大田錦城・斎藤拙堂・山田方谷関係の良質な資料群を見出した。くだって、東大古典講習科の卒業生（林泰輔・山田準・鹿島則泰ら）の資料をも収集した。

特に三島中洲に関しては、本プログラム採択と相前後して、三島中洲研究会をたちあげ、月1回（計9回実施）の研究例会を重ねて、本プログラムを羽翼する基礎的な研究活動を行っている。

2. 江戸・明治漢詩文集の目録作成

16年度は、おもに資料収集に当たった。当該分野の主要コレクションの目録、および公開されている各種のデータベースをもちいて、江戸・明治漢詩文集の目録作成のための基盤整備を行った。しかしながら、膨大な当該資料を短期間に悉皆調査することは困難と判断されるため、第一段階として、「江戸・明治漢詩文集年表」を作成することとした。この基礎データ作成作業は、一方で、16年度に購入した江戸・明治漢詩文集コレクションの意義付けにも不可欠な作業である。

3. 日本漢文学史テキストの編纂

漢文教育班における大学漢文教科書の作成に呼応して、また一面には内外に日本漢文学の沿革・概要を示す意味からも、日本漢文学史テキストの編纂を計画した。故倉石武四郎の講義ノート「本邦における支那学の発達」（未発表）は、日本における中国研究の史的展開を述べた特色ある内容を持ち、日本漢文学史のテキストとして恰好と考えられるので、出版に付すべく整理作業に着手し、5回の研究会を行った。整理した「本邦における支那学の発達」は、二松学舎大学における「日本漢文学史」の講義に、テキストとして試行する計画である。

4. 古医書文献研究、日本医家の伝記研究

近代以前の医学は漢学と関係の深い分野として認識されており、また和刻漢籍中の医書の多さも周知に属し、医学文献の基礎研究は日本漢文学の重要な分野である。公刊された日本医家の伝記資料の不十分さに鑑み、日本医家伝中最大の宇津木昆台撰『日本医譜』を、北里研究所医史学研究所と共同で電子テキスト化する作業をすすめ、姓名字号から検索できる『日本医学者総覧（仮称）』作成のための準備を行った。

C班

明治後半期より大正・昭和初期における日本漢文学の基礎的研究

明治後半期から大正・昭和初期に至る漢詩文結社の活動の一斑を明らかにするため、随鷗吟社（明治37年結社）を中心とした結社の活動について、機関誌等に拠ってその活動等の調査を行った。

中世日本漢文班

主任：磯水 絵

担当者：田中 幸江

協力者：福島 和夫

平成16年度の活動報告

近世の学問と琴楽は不即不離の関係にあった。それは、中国渡りの七絃琴という楽器自体のエキゾチズムに関わり、当時琴を手にした者が知識層に多かったことによる。だから、いわゆる琴士の流れをたどっていくと、それは全国各地の学統と重なっていく。それについてはこの1月に鬼籍に入られた岸边成雄氏の『江戸時代の琴士物語』に詳しいが、その七絃琴は近世以前に何度か日本にもたらされ、その都度すたれた。そうした音楽の歴史も、日中交流史の一環として今後詳しく考究されなくてはなるまいが、さしあたり、その前代にあたる中世は、貴族社会から武家社会へ転換する時代の過渡期にあって、それまで培ってきた文化遺産の廃忘を恐れての記録作業が盛んに行なわれた。実は琴楽の再興もこの時期に企図されたことがあった。

説話集や楽書の編纂が院政期より企図、実行されたのは、尚古思想のもとに故実典札が廃れるのを憂慮した識者たちが存在したからにほかならない。ところで、楽書は単に音楽関係の文献と判定して漢学資料から外してはならない。楽とは「礼楽」である。それは古来の儀式典札に欠くべからざる存在であった。したがって、政治体制の変革は自ずと礼楽にも変化をもたらしたわけである。そこで、朝廷や大寺、大社の付属にそれを伝業してきた家の人々は、前代までの記録をもとに、かねて新体制のための用意が肝要であったわけで、『三五要録』『仁智要録』等の楽譜集、『教訓抄』他の総合的楽書が陸續と編纂されたのである。

継続事業の一、上野学園日本音楽資料室蔵書目録作成作業は、そうして生み出された楽書の概要を知るための最初の営為であるが、16年度にはその成果として「楽歳堂旧蔵楽書目録」を作成することができた。それについては、同時進行していた正・続群書類従、管絃部の音楽事項索引、『教訓抄』編年年表、『続教訓抄』人名・事項索引等を本年度秋までに完成し、楽書研究の基礎資料集として本年度中に公にする。楽譜の譜字の成立、楽書

の序跋文に見られる日本漢文資料研究のための階梯として、これは早急に行なわれなければならない。

また、平成16年には、かねて説話文学会より本学に17年4月例会の企画および開催が要請されていたのを受けて、本活動との連動をはかり、藤原通憲関係資料の総合的研究を立ち上げた。大江匡房の有名な言談集『江談』の筆録者として『今鏡』に名を遺す藤原実兼は早世し、自身の業績はあまり知られていないが、その子通憲は、院政期の文人政治家として『大日本史』にも取り上げられ、著名である。彼は、自身が当時の政治を大きく牽引したように見做されて、『今鏡』『平治物語』ほか、当時の歴史物語、軍記、説話集等に頻出する。しかも、その子孫には僧俗の学者が多く生み出されており、彼らは中世の文学シーンを彩っているから、その子孫達の文学研究のためにも、通憲の研究は早く進むべきであった。それに関わらず、院政期の記録は膨大であるが故に『大日本史料』の当該部分は遅々として刊行されないうでいた。そこで、その刊行までの陥穽を埋めるべくこの企画はなされたのである。文人研究会を組織し、昨年秋には皆で、いわゆる『信西古楽図』の調査研究のために陽明文庫を訪れる本班協力者福島和夫先生に同行したのを弾みに、以来通憲の卒伝作成を急ぎ、併せて、先述した説話文学会4月例会の総合テーマを「藤原通憲」として、上野学園日本音楽資料室長福島和夫氏の「所謂〔信西古楽図〕をめぐって」と題する講演、事業推進担当者田中幸江の「『大悲山寺縁起』についての一考察」、本学大学院生神田邦彦の「楽書に見る藤原通憲」と題する、それぞれ通憲撰述の縁起、通憲に関わる音楽伝承の研究発表を要請した。なお、その資料集は3月に無事完成し、それが4月23日に無事終了した説話文学会例会とともに、関係諸方に好意的に受け取られ、当初の目的を充分果たすに足るものに仕上がったことを付記しておく。

朝鮮漢学班

主任：小川 晴久

担当者：渡邊 了好

平成16年度の活動報告

昨年度作成し、通説創刊号で紹介された活動計画のうち、三つのことを実施した。

(1) 李退溪『自省録』和刻本の収集

これは計画(二)の(3)「李退溪和刻本の把握」の一環である。この本は李退溪が友人や弟子に送った手紙(当時は学術論文に匹敵)の内容を失念することを恥じ、その主要なものを集め、一冊にしたものであるが、その意図を記した序に当る一文が、実は跋文(巻末に付される)であることが、今回入手した版本でわかった。阿部吉雄先生の解題(『日本刻版李退溪全集』下所収)によれば、この作品の日本紹介は三期にわたるので、国内分布状況を調べるだけでも興味深い。

(2) 北朝鮮の中学と高校の漢文教科書(コピー)と韓国における研究論文の入手

昨年8月末本学で開催した東アジア古典・漢文教育国際シンポジウム(東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来)を準備する過程で、韓国代表の林ヒョンテック先生のご協力で、成均館大学陳在教先生の論文と北朝鮮の漢文教科書の一部(コピー)を入手できた。教科書は1995年の高等中学校6年生のもの一冊、2002年の高等中学校2年生・6年生用のもの五冊である。陳在教氏の論文によれば、意外にも1954年から初等中学校(3年間、日本の小学校5年生からに相当)と高等中学校(6年間)で漢文教育を実施していることが判明した。日常的に漢字全廃でハングル専用であるにも拘らず、なぜ漢字教育を始めたかの理由づけとして、金日成は1963年1月3日の教示で、南朝鮮では漢字を使っているため、統一のために、統一を実現するまで、漢字を学ぶ必要があるとした。しかし漢字は別の国(中国)の字であり、使う必要はないという立場を前提にした上での限定づきの必要性の開示であった。陳在教氏は金日成教示の矛盾を厳しく指摘し、ハングル専用政策の後遺症の彌縫策とみたが、必要性に

おわれて中学校から漢字教育を復活させたことは間違いない。教科書を見るとご都合主義と悪しき実用主義がハッキリする。金日成のバルチザン闘争(革命伝統)や金日成・金正日親子の教示を教材とし、その中の漢字語を漢字に直して、漢字教育をさせるというのが、北朝鮮漢文教育の実態である。いわゆる古典教材から取る漢文は一割にも満たない。最新の教科書(2002年度)は金正日の絶対化と北による南の解放の必要性を説く文章が中心である。思想教育を通して漢字を沢山教え始めたことは確かである。しかし、古典教育、いわゆる漢文教育は皆無に近い(皆無ではない)。金日成や金正日より偉大な人は朝鮮には一杯いたが、それを教えてはならないのである。主体思想と漢文(古典)教育は根本から矛盾する。その矛盾の産物が北朝鮮の漢文教科書である。

(3) 朝鮮総督府編纂の漢文教科書(コピー)の入手

東京北区にある東書文庫で戦前の日本統治時代(1910年～1945年)に朝鮮総督府が発行した普通学校(小学校に当る)5年生・6年生用と中学校1年生～3年生用の漢文教科書の内容を調査した。前者は1923年時のもの、後者は1930年時のものであった。1923年の普通学校5～6年の漢文読本はハングルの吐(日本のテニオハヤナリ、ケリの送り仮名に当る)がついているが、1930年の中学校の漢文読本(巻1～3)ではそれが消えている。「国語」(=日本語)常用化=皇民化政策の表れであろう。普通学校の漢文読本は日常生活の基礎知識が漢文で綴られていて、いわゆる古典(漢文)は教材として登場していない。中学の漢文読本は中国の古文や日本人の漢文の外に、「前言往行録」として朝鮮の先人の故事も紹介している(分量は少ないが)。百聞は一見に如かずである。朝鮮総督府の漢文教科書をなお集め、漢文教科書の肯定的側面と否定的側面を調べてみるのも意味のあることである。

漢文教育班

主任：青木 五郎

担当者：小川 晴久・吉崎 一衛・山辺 進

協力者：宮内 保・小金澤 豊

平成16年度の活動報告

「双松通訊」創刊号に記したように、本班は、

- 一、大学漢文教科書の作成
- 二、明治以後の漢文教科書の収集と漢文教科書の変遷についての系統的研究の事業を遂行すべく活動を開始した。

一について

平成17年度より総合科目として「基礎漢文A」(春セメ)「基礎漢文B」(秋セメ)の二科目の開設を申請し、その教科書作りを行った。担当者・協力者による5回の会議を開催し、編集の基本的方針を申し合わせ、採用教材の選択を行った。

編集方針及び教材選択については、次の諸点に留意した。

- 1、朗読・暗誦を主たる教育目標とするため、人口に膾炙した語調のよい教材を選ぶ。
- 2、漢詩・漢文に対する関心を喚起させるため、図版(写真・画譜・漫画・地図など)・訳詩(英訳も含む)、中国音、日本の古訓解など、多様な情報を盛り込む。
- 3、日本人の作品の再発掘を行い、極力採録する。
- 4、東アジア漢字文化圏に対する広い視野をもたせるため、韓国の漢詩文をも極力採録する。
- 5、「基礎漢文A」は漢詩集とし、主として吉崎がその編纂に当たることとし、「基礎漢文B」は漢文集とし、主として小川が編纂に当たることとした。

諸般の事情で当初の計画通りには進まなかったが、「基礎漢文A」については、3月には試行本が完成し、「基礎漢文B」についても秋 semester に間に合うように、編集を急ぐことを確認している。

二について

平成16年度は、文行堂・松雲堂の二書肆から、明治大正期の漢文教科書(副読本・教授資料を含む。以下同じ)172種331冊を購入した。

また、鳴門教育大学図書館所蔵の「野地潤家文庫」中に、かなりの漢文教科書が含まれていることを聞き、その調査に出かけ29種74冊の漢文教科書を複写した(残部については17年度に再度出向して複写したいと考えている)。なお、「野地文庫」の調査に当た

っては、佐賀大学の浮田真弓先生、前鳴門教育大学図書館長の橋本暢夫先生に大変お世話になった。記して感謝の意を表する次第である。

さらに、大修館書店の池沢氏のご厚意で、私蔵の漢文教科書18種18冊についても複写することができ、都合、原本331冊、複写本92冊の漢文教科書を収集した。

今後は、筑波大学蔵本、鳴門教育大学蔵本(残部)、北海道教育大学蔵本などについて複写・収集し、漢文教材の史的研究のための基礎資料としたいと考えている。

なお、16年度は資料の収集を主としたため、漢文教育史の研究についての具体的な成果はあがっていないが、この分野の研究で、すぐれた業績をあげている石毛慎一氏(神奈川県立ひばりが丘高校)及び、漢文教育に関する著書・論文のリスト作りに精力的に取り組んでいる吉原英夫氏(北海道教育大学)にも、学外協力者として本プロジェクトに参加していただく内諾を得ており、今後は定期的に研究会を開くなどして、鋭意研究を推進させるつもりである。

日中文化交流班

主任：佐藤 一樹

担当者：竹下 悦子

協力者：陳 捷

平成16年度の活動報告

研究班が発足してから現在までのおよそ6ヶ月は、研究プロジェクトを今後推進していくための個々のパイロット・スタディ、および人的ネットワークの構築をはかる期間と位置づけた。その概要は次のようになっている。

○パイロット・スタディ：碑文・序跋・漢学者の位置

限られた時間とスタッフで出来る限りの研究成果を挙げるために、研究分担者ができるだけ緊密に連携を取り合うことを昨年9月に確認し、それに基づき、これまで数回の研究会をもち、それぞれの研究の途中経過を報告してきた。その結果、漢文をめぐる多面的で長い歴史のなかから、それぞれの関心が明治前半とその前後の時期に重なり合う形で向けられており、明確な輪郭をもった共同研究になりつつある。

研究班三人のうち、竹下悦子は、明治漢文の三大文宗の一人、三島中洲の残した文章から遊記文と碑文を選んで詳細な検討を加えた。紀行文は作者の興味や自由で自然な感慨を述べるのに対し、碑文は格調を重んじて決められた型の中に製作者の技量を多面的に発揮する文体であるが、三島は唐・宋の詩文を踏まえた語彙を多用するなど、双方に漢学の「文」の伝統を確乎として生かした文学的工夫をこらしている。なかでも碑文は、三島の文才が特徴的に発揮される最も得意とした分野であると同時に、その数の多さ、称揚する対象者の多彩さからいっても、漢学者三島の中核となる仕事といえよう。

明治期の漢学者の仕事として、碑文に並んで注目されるのが序跋である。王宝平は、国会図書館・内閣文庫・早稲田大学図書館を中心に、中国人の文章が附された明治刊行物150点ほどを調査し、書物の序跋や、論評・題箋・題辞・詩文唱和等多種多様な形での、日本と中国の間の文化交流を明らかにした。明治時代の日本の刊行物には中国人が寄せた序跋が多数存在するが、他方、中国人が著した本にも日本人が寄せた序跋も多く見られる。このような現象は、日清戦争を境に著しく目減り、この戦争が近代日中文化関係に決定的な影響を及ぼしたことが認められるが、序跋から文化交流の双方性を探ることが可能なのである。

政治から学問、技芸、芸術までを含む壮大な一大文化システムの担い手だった漢学者が、もっぱら碑文や序跋の筆者となっていくには、どのような経過があったのか。佐藤一樹は、近代歴史学の草創期に重要な働きをした、重野安繹、久米邦武、川田雍江らの行跡を検証し、歴史や哲学という新たな学問ジャンルの形成と漢学的学術観との齟齬と軋轢を明らかにしようとしている。漢学者という呼称が社会で広く用いられるようになるのは、実は学問を実践する制度や体系の近代的組み替えにともない明治になってからである。興味深いのは、中国では伝統学術が文・史・哲のジャンルに再編されていくのにたいし、近代日本ではそれまでの歴史記述の形式が一旦断絶され、漢学の分野から歴史叙述が取り扱い対象から除外されてしまうことである。

近代に入ってから漢文についてはこれまで、教育制度やカリキュラムの変遷など教育史の視点か、あるいはそれと関連する国語史の視点からもっぱら探求されてきた。研究班が共有する問題意識は、西洋にならった近代国家建設にともなう新たな文化全体のなかで、漢文のエクリチュールや、それが担ってきた知的体系や社会的機能が、どのような変貌を遂げたのか、あるいは遂げようとしたのか、といったことにあると言えよう。

○人的ネットワークの形成

研究班のメンバーはこれまで、さまざまな機会を使って、COEプログラムの趣旨や研究班の問題関心を紹介してきたが、幸いなことに多くの人々から強い関心や興味を寄せていただいた。そうした人々の何人かにも参加してもらい、今秋早々にワークショップの開催を予定しているが、それを機会にいっそう多くの研究者や大学院生に呼びかけて、恒常的な研究会の設立を模索したいと考えている。

書誌学・目録データ班

主任：高山 節也

担当者：町 泉寿郎・谷本 玲大

協力者：高橋 智・真柳 誠・小曾戸 洋

平成16年度の活動報告

本班の活動は、日本漢文資料全般に関わるデータベース構築関連の活動を中心に据え、その周辺事業として、邦人により和刻本漢籍に附された序跋その他を集成する企画を立ち上げた。以下、この二点について報告する。

1 データベースの構築

本プログラムの計画するデータベースは、日本漢文学研究拠点というプログラムの目的に沿うべく、データ内容を日本漢文文献（邦人の漢文による著作文献）・和刻本漢籍（邦人による漢籍の復刻本邦人による句読訓点や欄外注記あるいは序跋凡例等の附されたものが大多数を占める）・準漢籍（漢籍に基づきつつ邦人による改編や原文中への注解の施されたもの等）に限定することとし、これらの所在を明白にするべく、まず日本全国における如上の資料の所在調査を、全国の図書館・資料館へのアンケート方式によって実施し、そのうち一割に相当する約400件の回答を得た。それに基づき16年度は北海道・東北地区への実地調査を行い、寄贈や購入も含めて多数の目録・資料を入手した。

また、研究資料として本プログラム自体が原典書籍を保有する必要があり、各班の直接資料となりうる日本漢詩文・和刻本漢籍等約200点を収集し、さらに明治以降の我が国漢文教科書約300点を購入した。

目録については、その記載する項目中から当該資料を選択して、これを所在情報として公開すること、原典資料・教科書資料についても同様に情報公開の対象とすることを目標として、それらを分類し、必要項目を簡明に情報化するための入力機構を構築すべく、前後約10回にわたる業者との折衝を経て、年度末をもって構築作業を完了した。入力はすべてユニコード入力とし、古書のみならず近年の論文や教科書にも対応でき、また国書のみならず漢籍にも対応しうる機能をもたせるよう、分類項目は十進分類と四部分類両者を併用しうるものとし、詳細項目は、書名事項3種・出版事項3種・編著者名事項・収蔵機関・函架番号・備考を備え、さらに画像データの処理能力を付加したものとなった。

これによって、現在目録からの入力および本プログラム収蔵資料の入力が開始されている。なお、以上は本班が中心とする活動であるが、これは必ずしも本班独自のものではなく、本プログラムにおける基本活動として、すべての班活動に関連する事項である。

2 邦人序跋集成の作成

和刻本漢籍・準漢籍については、邦人による訓点のもとより注釈や校訂、さらには邦人の序跋等が附されているものが多々あり、ここには邦人の学問の系統や当時の思潮が十全に反映されているといえる。にもかかわらず個々の文献におけるこれら邦人の関与については、特に著名な漢学者を除外して、ほとんど顧みられていないのが現状である。これに鑑みて、特に個々の書籍出版に関する事情や学問の師承関係、あるいは当時の出版の傾向などを如実に語る邦人の序跋を集成して、近世文化や思潮研究の資料を提供することを計画したのである。

具体的には江戸期（慶長元年）より明治初年にいたる和刻本漢籍・準漢籍を対象とするが、当初は和刻本漢籍を中心に調査し、『和刻本漢籍分類目録』の対象外であった、医学書・仏典をもこれに加えて、本計画の網羅性を確保しようとした。一般和刻本は経部から収集を始めた。医学書・仏典については相当数の資料調査を完了しているが、一般文献は17年度以降の調査実施を目指して、現在準備中である。

平成16年度COE研究員研究報告

COE研究員：會谷 佳光

日本における仏典の伝入と出版に関する研究

平成16年度は、本研究計画の柱である江戸時代に出版された和刻本仏典の版本調査を中心に行った。調査に先立って、本学附属図書館の漢籍分類目録をはじめ、東京近郊の主要な漢籍所蔵機関である東洋文庫・内閣文庫・東京大学総合図書館・国立国会図書館の目録から、和刻本仏典の抽出作業を行い、目録上、この五機関だけで、約二千五百点余が所蔵されていることが確認された。もちろん、の中には同版本もかなり含まれると推測されるが、それでも相当な分量である。こうして収集された情報をもとに、本年度はこのうち本学図書館・東洋文庫・国会図書館の調査を行った。調査点数は、本学図書館16点(終了)、東洋文庫78点(終了)、国会図書館四点の92点である。これに加えて、成田山仏教図書館のご好意により、入庫調査とデジタルカメラでの撮影を許され、現時点までで約五百点(準漢籍を若干含む)の調査を行った。よって本年度中に行った四機関の合計調査点数は約六百点となる。平成17年度は引き続き成田山仏教図書館の調査を行っていくと同時に、国会図書館・内閣文庫・東京大学総合図書館の調査を行う予定である。

版本調査のほかには、収集した版本データを取り込んだ解題目録、『江戸時代出版和刻本仏典目録』(仮)の作成に着手した。目録の作成にあたっては、その目録をいかなる意図のもとに編むかが最も重要となるが、本研究計画の調査対象が江戸時代出版の和刻本仏典であることを考慮して、寛文九年から天和元年にかけて雕版され、その後の仏典出版に大きな影響を与えた黄檗版大蔵経を、目録の基幹に据えることにした。黄檗蔵はおよそ千六百点余の仏典を収める大部な仏教叢書であり、これだけでも和刻本仏典の大多数を網羅することができる。なおかつ、その目録である「黄檗蔵目録」(その内容は明北蔵の目録である『大明三蔵聖教目録』そのものである)が『昭和法宝總目録』第二巻に収録されており、その整理者によって『大明三蔵聖教目録』の

各著録仏典に附された整理番号は、これまでの黄檗蔵の整理においてもたびたび使用されてきた。よって、この目録を柱として、その各著録仏典にこの整理番号を附し、それぞれに調査済みの版本、及び各機関の目録上で確認した版本(随時調査の予定)を配していこうと考えている。これは、江戸時代の仏典の出版状況を考察する上で最も着実な方法であり、そうして明らかになった出版状況から、本研究計画のテーマである江戸時代における仏典の受容と伝承の実態を考察することも可能となるであろうと考えている。

最後に、本年度の調査研究が、「研究計画」全体のなかでどう位置づけられるか述べておきたい。「研究計画書」では「日本で編まれた仏典関係の目録を活用して、日本における仏典の伝入状況を究明するとともに、こうして伝入された仏典にもとづいて日本で出版された仏典、所謂和刻本仏典の総合的な調査・研究を計画している」と記したが、これは要するに、本研究課題を遂行していく上で、大きく分けて目録学からのアプローチと、版本学からのアプローチの二つの方法があり、これを同時進行の形で進めていくのが最も有効であることを述べたものである。ただ「研究計画書」にも記したとおり、和刻本仏典の種類・版の多さに加え、これら仏典に版本学的立場からの専門的な調査の手がほとんど入っていない現況にかんがみた結果、版本調査を第一優先にした次第である。一方、目録学からのアプローチを今後どのように進めていくかについては、この『江戸時代出版和刻本仏典目録』(仮)に「目録著録状況」の項目を立てて、中国及び日本の様々な目録上に著録された仏典を時代順に配列していくことで、中国での各仏典の翻訳著述から、それが日本にいつ頃伝入してきて、どのように受容されていったかを一覧できるようにしたいと考えている。

平成16年度COE研究員研究報告

COE研究員：清水 信子

伊藤鹿里旧蔵漢学資料の整理と研究—大田錦城未刊資料を中心として

総合的な研究課題を、近世から近代にかけての日本における漢学の受容、延いては日中学術交流の歴史、動向、背景等の考察、解明として、まず当時の漢学者をはじめ知識人の旧蔵書を調査することから開始した。中でも、ひとつの文献の日本における広範な受容を把握できるものとして、江戸、京都、大阪といった都市在住の知識層ではなく、地方を拠点とした知識層の旧蔵資料に着目し、その具体的対象人物を、近世後期郷里信濃を拠点とした漢学者伊藤鹿里（名祐義、字忠岱、号鹿里・潜龍齋・仰継堂、以下称「忠岱」）に絞り、その旧蔵資料調査、整理に着手した。尚、忠岱は、医学を吉益東洞に、儒学を大田錦城に学んだことにより、漢蘭折衷医学及び考証学に通じ、著作も医学と儒学の両面に亘り、漢籍、国書等刊行された文献の他、数多くの講義筆記を存している。

研究過程としては、当初の計画の中から、まず現在忠岱の旧蔵書が管理されている長野県望月町春日の忠岱玄孫伊藤祐俊氏宅に赴き、町泉寿郎本学講師、本学大学院生加藤麻衣子氏協力のもと旧蔵書約600部1000冊以上の中から医学・儒学を主とした文献資料を対象とし、約200点強について調査した。次にその調査カードをもとに基本的な書誌事項の確定、それによる整理、分類、そしてその目録化を中心に行った。

旧蔵資料について、平成16年度の調査段階で判明している概要を以下に示すと、大別すれば、日本人による著作である純然たる国書と、中国人による著作について日本人が注釈等を施したもの、或はそれによる講義録等の準漢籍の二種となる。国書については、調査対象として抽出した関係上、医書を中心として、その他、忠岱の儒学の師である大田錦城による漢学関連資料等が僅かにあり、準漢籍については、四部分類によれば経部、子部の二部に限られ、若干経部が多く、各類では、医家類、四書類が多く、次いで道家類、易類、その他書類、詩類、儒家類、春秋類、孝経類、雑家類、諸経総議類となっている。

準漢籍の分類傾向により、忠岱の学問傾向の一端が推察されるが、それについて医家類、四書類に次いで多い道家類についても看過できない。忠岱は、道家類では特に「老子」に関心があったため、大田錦城、晴軒父子等による『老子』注釈書、また講義録である「聞書」類等が残されている他、自身による注釈書『老子国字解』が仰継堂蔵版として、天保九年に刊行しており、またその稿本も残されている。ちなみに、忠岱の『老子国字解』は『国書総目録』未著録である。

錦城父子の『老子』関連文献としては、錦城には未刊行の『老子妙斲』はじめ、講義を忠岱が筆記した「聞書」類があり、晴軒には天保13年に刊行される『老子全解』の草稿と見られる『老子全解稿本』があり、また錦城の場合と同様、講義録が残されている。これら「聞書」類については「老子」に限らず、各々詳細な講義年月日の記述とともに、「周易」「書経」「論語」「大学」「中庸」等多数残されているため、これらの詳察は、忠岱だけでなく錦城を研究する上でも有効であろう。

各講義録類については、忠岱自身が筆記したものの他、錦城の同門であった海保尚賢はじめ他者が筆記したものを書写しているものもあり、また、それについては、各資料の多くに書写識語として比較的詳細に記録されている。それにより、当時、相互に資料の往来があったことは明白であり、それらにより忠岱をとりまく交流関係も窺知できよう。

また、各資料の往来については、書写識語からだけではなく、京都大学富士川文庫をはじめ各所に散見する忠岱旧蔵書と重なる資料からも窺測される。その資料の中には忠岱が筆記したことやその筆記本を書写したことが明記されているものもあり、その伝承関係も看過できず、興味深く、今後、それら忠岱筆記本の各所への伝播についても検証していかなければならない。

寄贈資料一覧

(平成16年12月～平成17年3月)

■一般書籍

タイトル	発行所（発行年）
歴史与社会 八年級	上海世紀出版集團上海教育出版社(2003.1) (王宝平氏 寄贈)
世界近代現代史	浙江省新華書店(2003.6) (王宝平氏 寄贈)
中国近代現代史	浙江省新華書店(2003.6) (王宝平氏 寄贈)
中国近代現代史	浙江省新華書店(2003.6) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2003.6) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2000.11) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2003.4) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2002.12) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2003.5) (王宝平氏 寄贈)
語文	浙江省新華書店(2002.11) (王宝平氏 寄贈)
韓国文集索引 I	成均館大学校大東文化研究院(1978.12) (小川晴久氏 寄贈)
国立民俗博物館館蔵資料概要	国立民俗博物館資料委員会(1991/10) (高田宗平氏 寄贈)
国立歴史民俗博物館要覧	国立歴史民俗博物館(2004/6) (高田宗平氏 寄贈)
平成16年度21世紀COEプログラム採択拠点の事業概要	文部科学省高等教育局大学進行課(2005.1) (高田宗平氏 寄贈)
宋代書籍聚散考	汲古書院(2004/8) (會谷佳光氏 寄贈)

■目録

タイトル	発行所（発行年）
国立故宮博物院善本旧籍総目録	国立故宮博物院(1983.4) (佐藤保氏 寄贈)
八戸市立図書館漢籍分類目録	八戸市立図書館(1977.3) (佐藤保氏 寄贈)
東洋文庫所蔵漢籍分類目録	東洋文庫(1978.12) (佐藤保氏 寄贈)
増補 東洋文庫朝鮮本分類目録	国立国会図書館(1979.3) (佐藤保氏 寄贈)
漢籍分類目録 集部 東洋文庫之部	東洋文庫(1967.3) (佐藤保氏 寄贈)
尊経閣文庫漢籍分類目録	尊経閣文庫(1934.3) (佐藤保氏 寄贈)
天津日本図書館史資料匯編	天津図書館(1996.3) (李国慶・劉薔氏 寄贈)
天津図書館蔵旧版日文書目	天津図書館(1996.3) (李国慶・劉薔氏 寄贈)
天津図書館蔵日本刻漢籍書目	天津図書館(1996.3) (李国慶・劉薔氏 寄贈)
浙江図書館古籍善本書目	浙江教育出版社(2002.11) (李国慶・劉薔氏 寄贈)
宮城県高等学校和漢古書総合目録 宮城県高等学校教育研究会	宮城県高等学校教育研究会 図書館研究部会(1995.3) (遠藤幸生氏 寄贈)
東北大学附属図書館所蔵 晴山文書目録	東北大学附属図書館(1992.2)
東北大学附属図書館本館所蔵 新訂貴重図書目録洋書篇	東北大学附属図書館(2004.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1976.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1978.1)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1979.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1982.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1974.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1975.3)
東北大学所蔵和漢書古典分類目録	東北大学附属図書館(1979.3)
多度津文化財保存会倉林家旧蔵漢籍目録	多度津文化財保存会(2003.12) (清水信子氏 寄贈)
弘前図書館蔵 津軽家文書総目録	弘前市立弘前図書館(1984.3)
岩見文庫郷土資料総目録	弘前市立弘前図書館(1982.12)
弘前市立図書館蔵書目録 牧野家文書目録 伊東家文書目録	弘前市立弘前図書館(1998.12)
八木橋文庫目録	弘前市立弘前図書館(1993.3)
弘前図書館郷土資料目録 第11巻 津軽家文書目録補遺 岩見文庫目録補遺 和徳小学資料	弘前市立弘前図書館(1981.3)
弘前図書館 郷土資料目録 第5巻 弘前図書館一般郷土資料目録	弘前市立弘前図書館(1965.1)
弘前図書館 郷土資料目録 第6巻 弘前図書館一般郷土資料目録その2	弘前市立弘前図書館(1968.3)
弘前図書館 郷土資料目録 第10巻 弘前図書館一般郷土資料目録その3	弘前市立弘前図書館(1978.3)
弘前図書館 郷土資料目録 第10巻 弘前図書館一般郷土資料目録その3	弘前市立弘前図書館(1978.3)
弘前図書館郷土資料目録 別巻 書名索引 第1巻～第9巻	弘前市立弘前図書館(1975.3)
佐伯藩政資料漢籍目録	佐伯市教育委員会(2004.12) (高山節也氏 寄贈)
佐賀女子短期大学蔵小田文庫受入目録	佐賀女子短期大学
佐藤清太文庫漢籍目録	福島県立図書館

寄贈資料一覧

(平成16年12月～平成17年3月)

■報告書

タイトル	発行所（発行年）
21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター News Letter	愛知大学国際中国学研究センター事務局(2004.7)
21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター News Letter	愛知大学国際中国学研究センター事務局(2004.7)
"Interaction and Transformations: Bulletin of Japan Society for the Promotion of Science 21 Century COE Program(Humanities), East Asia and Japan: Interaction and Transformations, Volume 1"	九州大学大学院比較社会文化研究院(2004.12)
法政大学国際日本学研究所研究報告 第5集	法政大学国際日本学研究所(2004.7)
法政大学国際日本学研究所センター国際日本学研究所年報2003	法政大学国際日本学研究所(2004.3)
中国古典文献における画像及びテキストデータ処理の諸問題	関西大学(2004.12)
ヨーロッパの革新的研究拠点:衝突と和解	一橋大学
年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」 研究推進委員会(2004.12)
奈良と古代	奈良女子大学21世紀COEプログラム New Letter編集委員会(2004.12)
先端社会研究	関西学院大学出版会(2004.12)
Interface Hymanities	「インターフェースの人文学」研究開発委員会(2005.2)
日本、もう一つの顔	大阪大学21世紀COEプログラム 「インターフェースの人文学」(2005.2)
演劇研究センター-紀要	早稲田大学演劇博物館(2005.1)
演劇研究センター-紀要	早稲田大学演劇博物館(2005.1)
法政大学国際日本学研究所センター国際日本学研究所年報2002	法政大学国際日本学研究所(2003.3)
法政大学国際日本学研究所研究報告	法政大学国際日本学研究所(2003.9)
典籍の国際的交流・受容(訓読)	北海道大学大学院文学研究科(2004.3)
山形県漢学者総覧稿	山形大学(2005.2)
中国宗教文献研究国際シンポジウム	京都大学人文科学研究所(2004.12)
漢字と文化	京都大学人文科学研究所(2005.2)
日中の文化関係を考える	法政大学国際日本学研究所センター(2005.2)
東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来	二松学舎大学国際シンポジウム事務局(2004.8)
東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来	二松学舎大学国際シンポジウム事務局(2004.8)

■雑誌その他

タイトル	発行所（発行年）
致知	致知出版社(2002.12)
大学公開講座講義資料(九段キャンパス)書道講座	二松学舎大学(2004.8)
大学公開講座講義資料(九段キャンパス)教養講座	二松学舎大学(2004.8)
大学公開講座講義資料(柏沼南キャンパス)教養講座	二松学舎大学(2004.8)
大学公開講座講義資料(柏沼南キャンパス)書道講座	二松学舎大学(2004.8)
人文科学研究のフロンティア	京都大学人文科学研究所(2004.11)
明日の東洋学	東京大学東洋文化研究所附属 東洋学研究情報センター(2004.10)
国際シンポジウム	九州大学大学院人文科学研究院(2004)
国際シンポジウム	九州大学大学院人文科学研究院(2004)

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

活動・会議一覧

(平成16年12月～平成17年3月)

●講演会

■公開講演会

開催日	講師	所属	演題
第2回 16.12.17	呉 格	上海・復旦大学	中国における日本漢文学研究の現状と課題
第3回 17.01.08	ウイリー・ヴァンドゥワラ	ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学	欧州における日本漢文学研究の現状と課題

■テーブルスピーチ

開催日	講師	所属	演題
第4回 16.12.16	呉 格	上海・復旦大学	世界の日本漢文学研究
第5回 16.12.22	李 国 慶	天津図書館歴史文献部主任	中国の古籍研究
第5回 16.12.22	劉 薔	清華大学図書館古籍部主任	清華大学の古籍研究
第6回 17.01.12	ウイリー・ヴァンドゥワラ	ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学	欧州の日本漢文学研究
第7回 17.02.10	石塚 晴通	北海道大学	日本漢文学研究
第8回 17.03.30	サオワラック・スリヤウォンバイサーン	タイ国 チュラーロンコーン大学	タイにおける日本漢文学研究の現状と課題

●現地調査

■国内調査等

氏 名	期 間	行き先	主な調査機関
吉原 浩人	16.12.22～16.12.23	仙台市	東北大学
磯 水絵	17.01.25～17.01.29	青森市他	青森県立図書館ほか
田中 幸江	17.01.25～17.01.29	青森市他	青森県立図書館ほか
吉原 浩人	17.02.03～17.02.05	奈良市他	興福寺、東大寺ほか
河野 貴美子	17.02.03～17.02.05	奈良市他	興福寺、東大寺ほか
谷本 玲大	17.02.13～17.02.14	天理市	天理大学
清水 信子	17.02.18～17.02.21	秋田市	秋田市立土崎図書館
町 泉寿郎	17.02.18～17.02.19	秋田市	秋田市立土崎図書館
大島 晃	17.02.27～17.03.01	山形市他	山形大学ほか
青木 五郎	17.02.27～17.03.03	鳴門市	鳴門教育大学
小川 晴久	17.02.28～17.03.02	福島市他	福島県立図書館ほか
山辺 進	17.03.07～17.03.10	札幌市	北海道大学ほか

●諸会議

■推進委員会

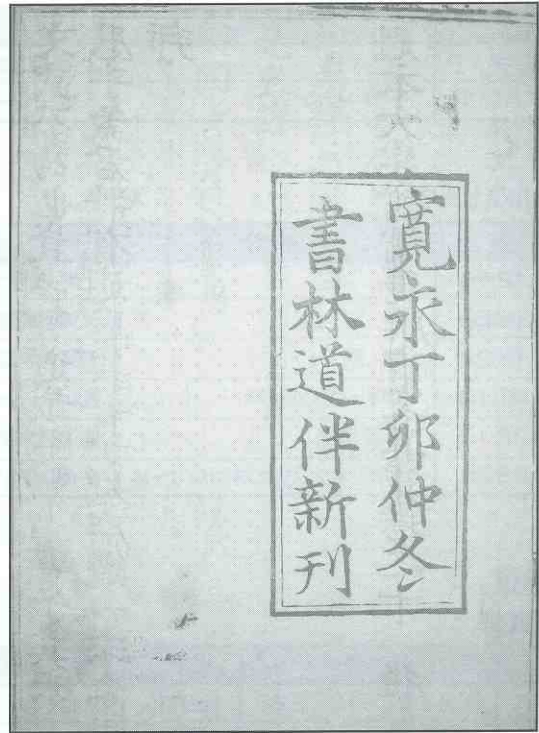
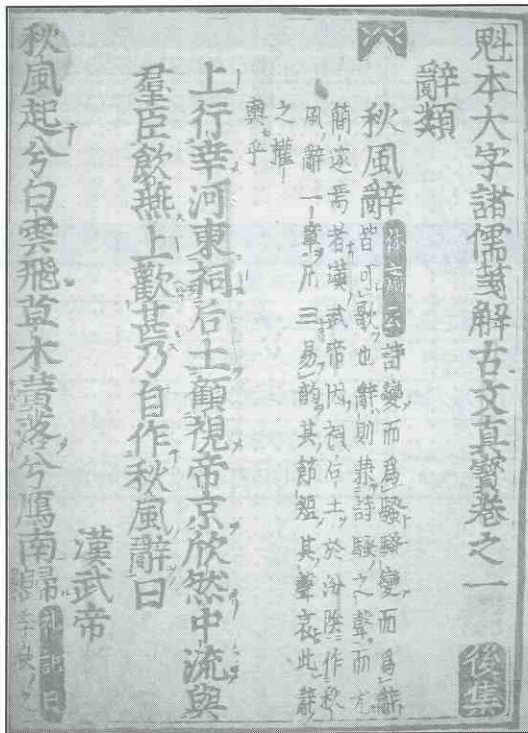
第4回	16.12.08
第5回	17.01.12
第6回	17.01.19
第7回	17.02.16
第8回	17.03.08

■事業推進担当者会議

第5回	16.12.16
第6回	17.01.12
第7回	17.02.10

■実施委員会

第15回	16.12.01	第22回	17.01.19
第16回	16.12.08	第23回	17.02.02
第17回	16.12.15	第24回	17.02.16
第18回	16.12.22	第25回	17.02.21
第19回	17.01.07	第26回	17.03.03
第20回	17.01.11	第27回	17.03.16
第21回	17.01.18	第28回	17.03.30



魁本大字諸儒箋解古文真寶後集十卷

寛永4年書林道伴刊本

編集後記

ニュースレター「^{そしやうつうしん}雙松通説」第2号をおとどけします。「雙松」は本学「二松学舎」の二松を言い換えたもので、本プログラムの日本漢文学と本学における国文・中文の伝統を象徴します。「雙松」は、荻生徂徠の名「なべまつ」と同字ですが、日本漢文学との関わりという意味で、この点でも象徴的な命名であると思っています。

本号は、今西幹一新学長、佐藤保新理事長の台湾講演報告、白藤禮幸総括責任者の挨拶のほか、16年度の各研究班活動報告を中心に編集しました。いよいよ第二年度ということで、多様な資料の集積と、研究実績の蓄積が期待されます。本年はアジア・欧米をも含めた研究者による国際シンポジウムの開催を予定しております。ふるってご参加ください。また日本漢文学関連の情報も多数お寄せいただきたく、お願い申し上げます。(T)

お知らせ



二松学舎大学

21世紀COEプログラム

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

世界における

国際シンポジウム

日本漢文学

研究の

現状と課題

欧州・米国・ベトナム・韓国
中国及び日本の場合

期 日

平成17年9月3日(土)～9月4日(日)

会 場

二松学舎大学 九段校舎 中洲記念講堂

参加費

無料

※ただし、レセプションの申込者は、3,000円(当日納付)

申込締切

平成17年7月29日(金)

申込方法/所定の申込用紙(二松学舎大学21世紀COEプログラムホームページからダウンロードできます)に記入のうえ、COE事務局あて送信又は郵送してください。

記念講演

9月3日(土) 10:15～11:45

石川 忠久(本学名誉教授,前学長)

報告等

9月3日(土) 13:00～14:30

オランダ・ウイレム・ヤン・ボート(ライデン大学 教授)

15:00～16:30

アメリカ・ロバート・ボーゲン(カリフォルニア大学 教授)

9月4日(日) 9:00～10:30

ベトナム・グエン・チ・オワイン(ハンノム研究所 教授)

10:45～12:15

韓 国・沈慶昊(高麗大学校文科大学 教授)

13:30～15:00

中 国・王 勇(浙江工商大学日本文化研究所長)

15:30～17:30

日 本・後藤 昭雄(和漢比較文学会代表理事)

レセプション

9月3日(土) 17:30～19:30

九段校舎 13階(会費制)

主催:二松学舎大学COEプログラム・二松学舎大学

共催:和漢比較文学会・全国漢文教育学会・(財)斯文会・漢字文化振興会

問い合わせ先/三松学舎大学COEプログラム事務局 TEL:03-3261-3535 FAX:03-3261-3536

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16 URL:http://www.nishogakusha-coe.net

会場アクセス

■JR市谷駅・飯田橋駅下車徒歩15分

■地下鉄 東西線・半蔵門線・新宿線 九段下駅下車徒歩8分

※会場は駐車場がありません。お車のご来場はご遠慮下さい。





蘇氏印略四卷
明治42年四宮憲章東京光風樓書房修本模刻鈐印

雙松通訊 No.2

発行日

平成17年4月30日

編集・発行

二松學舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL : 03-3261-3535 FAX : 03-3261-3536

e-mail : coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL : <http://www.nishogakusha-coe.net/>